



『水音の虹』

豊島岡女子学園高等学校 一年 山崎 美穂

緑の森がみえてきて、川の音も聞こえてきて、「おばあちゃんち」の風景が広がります。美花はもう、走り出したいくらい…。

美花は七歳。今年小学校に入学したお祝いに、夏休みは一人で、おばあちゃんの家まで行かせてもらえることになったのです。

美花はおばあちゃんの家が大好き！同じ年の三人のいとこもいるし、大きくて、アニメに出てきたトトロが出て来そうな森もあるし、魚のいる川もあるから！お兄ちゃんが、

「虫ばっかいる田舎なんて、行きたくねー。」
と言っているが、美花にはどうにもこうにも、よくわからないのでした。

「おばあちゃん！」
おばあちゃんの姿が見えると、美花はダツと走り出しました。おばあちゃんの家からは、二人の男の子と一人の女の子が出て来ます。美花が来るのを

今か今かと待っていた、三人のいとこたちでした。



一時間後、美花といとこたちは、おばあちゃんの切ってくれた山盛りのスイカと一緒ににおばあちゃんの畑の端っこにすわっていました。すぐ後ろは大きな森。

「美花はさ、いつつも来るのがおそいよ。」

そう言ったのは健。いつもは隣の隣の町に住んでいます。眼鏡をかけていて、難しい言葉を時々使って、テレビの『けんきゅうじよ』の『はかせ』そっくり。だからあだなはハカセ。

「美花ちゃんはあると違ってお家が遠いんだからしょうがないでしょっ！」これは綾。おばあちゃんの家の近くにお家があります。しつかり者で、あだなはアネゴ。これは美花のお兄ちゃんが名づけ親。美花たちは、よく意味がわからないけど、なんだか面白くって、こう呼んでいます。

「アネゴもハカセもやめて。」

にっこりおっとり言ったのは勇。綾と同じで近くに住んでいます。優しくて、のんびりに見えるから、のんって呼ばれています。『のんびり』ののんびんです。

「みんな仲良く、でしょっ。」

美花が言います。美花はなんて呼ばれてるかというところ…美花は美花なんです。前に、

「美花っていうのは、可愛いお花ってことなのよ。」

って美花のお母さんが言ったので、そのままなんです。だって美花はいつもニコニコ。笑った顔はお花みたいに可愛いから！



「ところで美花君。今日、君に話すのはだな。」

ハカセが偉そうに言いました。ハカセは偉そうに言うのが得意なんです。それからゴホンと咳払いをして、アネゴとのんにチラッと目配せをして、声を低くして、言いました。

「森に、おばけが、いるんだ。」

美花の手から、食べかけのスイカがポロツと落ちて行きました。

「：おばけって、白くフワアとしているやつ？」

ハカセは首を横にふり、話し始めます。アネゴも一緒に喋ります。

「違う。男の子。同じくらいの。」

「でも、私たちの知らない子なの。それに：」

アネゴが言いかけたところへ、美花が口を挟みます。

「どこから来た子じゃ、ないのかなあ？」

美花が言ったところへ、のんがゆっくり、静かに話し始めました。

「その子はね、光ってた：虹みたく。」

沈黙してしまったみんなの調子を取り戻させたのは、ハカセでした。

「男の子をもう一度見ようではないか！早速作戦だ！」

誰も反対しません。怖いものみたさってという気持ちと、『作戦』なんていう、カッコイイことにひかれたんです。

「作戦にはね、基地とか作って、名前をつけるのが、必要なのよ。」

しっかり者のアネゴが仕切り始めます。



しばらくして、作戦にはぴったりの名前がたくさんつきました。

畑の端っこ…きち（基地）

森…ととろのもり（トトロの森）

森の真ん中の沼…かいぶつぬま（怪物沼）

沼のとなりの小さな池…ふしぎいけ（不思議池）

沼と池の間の大木…ぬしぬき（主の木）

みんな、大満足。

ところで、ふしぎいけは、村のおばあちゃんたちの話をこっそり聞いたものを、名前にしたんです。こんな、話でした。

「今年も、森の池は、枯れてしまうのかしらねえ…。」

「毎年毎年、夏がおわると枯れてしまって、次の年には元通り。

不思議、不思議。」

作戦をたて初めて三日。四人は早くもしぼみ始めていました。

今日もきちに集まってはみたものの、みんな、黙りこくっています。聞こえるのはセミの声だけ。

「あああ、どうしよう！」

アネゴが大きなため息をついて言いました。

「今日はさ、別なこと、しようよ、きぶんでんかんも必要ですよ。」

ハカセが難しい言葉を使ってみせます。気分転換なんて、みんな始めてきく言葉。



「じゃあね、そのきぶんかんでんのために、隠れんぼうしたらどう？隠れると美花が提案します。」

「かんでんじゃなくててんかん。うん、しよう、しよう。」
ハカセもみんなものってきます。やることが見つかって、大喜びなんです。

「一、二、三…。」

早速始まります。すぐ始まるのが、四人のすごいところ。オニはのん。後出しを二回もしたから、怒ったハカセに、そうだ、ととのもり！美花って頭いい！美花は自分の考えにご満悦。木のしげる森の中へ走っていきます。森は、ちよつと暗くて、夜だったら、絶対入りたくない所ナンバーワンになりそうな所。

美花は、ぬしのきのふすぎいけに近い方のうろの中に隠れることにしました。シインとした薄暗い森で、体育座りをしているのは、怖いものです。

（ぬしのきに食べられちゃうかも…。）

美花の頭に、次から次へと怖い事が浮かんでは消えしていて、もう限界になったその時、美花のいるうろの目をサツと光が通りすぎました。美花は慌てて目で追います。

「…虹色の…男の子…！」

美花はびっくりして、口をりんごが入りそうなくらいあけて、止まってしまいました。

（あれがおぼけなのかなあ…。でも…きれいで、あんまり怖くな



いなあ。」

びっくりがおさまってくると、もともとはとつても元気な美花。男の子を追いかけたくなってしまいました。

「まって！まって！まって！」

美花は全速力で走ります。鬼ごっこの得意な美花です。春の運動会でリレーの選手になった美花です。

「つかまえた！」

大声で叫んだ男の子の肩に手をかけた美花は思わず、あつと叫んでしまいました、

手が光の中へ入って行きます。キラキラと虹色に輝く、光の中に。

「ねえ、なんで逃げるの？おばけなの？」

その言葉に、光る男の子は止まりました。

「ち：違うよ：僕、おばけじゃ：ないもん：。」

振り返った男の子のオーロラのような瞳から、いろんな色の涙が転がり落ちます。赤、青、紫…。

「ごめんね。美花が笑いの：？おばけって言っちゃったから：？もうあんなこと言わないから。ね？」

美花はぼろぼろ涙を流す男の子に大弱り。なんとかなだめて、さつきのうろにつれて行きました。

「ね、なんでここににいるの？お名前は？おばけじゃなくなつてなあに：？」男の子を座らせるが早いか、美花は男の子を質問責め。



男の子は答えます。」

「ぼ、僕は…水音。…おぼけじゃなくって…何だろう?…」

そして、ポツリと言いました。

「僕、僕、食べられちゃうかも…。」

美花は、木のうろの中で始めて水音を見たときと同じくらい、口を大きく開けて、水音をじっと見つめました。水音は続けます。水音の話は、こんなことでした。

昔々から、『ふしぎいけ』はとてもきれいな池でした。木と木の間から時おりさす太陽や月の光で、池はキラキラ光りました。あんまりキラキラ光るので、その光から、一人の虹色に光る子供が生まれ、その子供は自分の住む池を守るようになったのでした。

池の隣には沼があります。美花たちの『かいぶつぬま』です。そこは池とは反対で、昔々からどんよりにごっていました。そしてそのにごりの中から、怪物がうまれたのです。名前をバックンベロンといいました。バックンベロンは夏以外は眠っています。光がいつもよりさす、夏だけ、起きてくるのです。

そして虹を三本食べないと死んでしまいます。バックンベロンは、光に憧れた生き物なのでした。

ひと夏で虹が三本出ることは、そうそうないことです。お腹のすいたバックンベロンはある日、『ぬしのき』の側を走り回る虹色の子供を見つけました。

すると不思議なことに、お腹がいっぱいになりました。虹色の



子供は、虹三本分以上に値したのです。そのことを知ったバックンベロンは、虹が三本出ないと、虹色の子供を食べるようになりました。

ほとんど毎年、虹色の子供が食べられてしまいました。虹色の子供は食べられても、食べられても、翌年にはまた、違う子がうまれきたのです。池は、子供がいない間、水が枯れるようになっていました。池にとつても、子供は大切なものになっていたので。そして今年、水音という男の子が生まれてきたのでした。池が話した、水の音色という意味の名前を持った、男の子が…。

水音が話しおわると、森の中はシンとしてしまいました。

「…水音君も、食べられちゃうの？」
話をきいて、悲しくなった美花は、泣きそうになりながら、水音にききました。

美花の言葉をきいて、またポタポタと涙をこぼしながら、水音が言います。

「僕、うまれた時から、なぜかこのことを知ってた。それで、誰かに助けてもらおうと思っただんだ…。池は…ね、誰かに助けてもらおうなんて考えたの、僕だけだっ。でも、やっぱり怖かった…！」

泣き出してしまった水音を見て、美花は逆にやる気になりました。「美花にまかせて！美花のお友達はみんなやさしいんだから！き



つと、水音君、助かるんだから！」

ハカセとアネゴの口が、まるでまな板が入りそうなくらい大きくなって止まっています。のんはいつものようににっこり笑っています。ここはきちから少し来た、ととろのもりの入り口。

「そっそんなっ。本当にいるなんて…。し…しんぴだっ！」

ハカセが難しい言葉で叫びました。

「おばけじゃなかった…？」

アネゴもつぶやきます。

美花は水音を励まして、みんなのところへつれて行ったのです。そしてみんなが何か叫び出す前に、美花のきいた話を、みんなに話したのでした。

「と、とにかく、水音を助けなきゃ。」

ハカセが調子を取り戻し始めました。

「バックンベロンを倒しちやえばいいのよ。」

アネゴが言います。

「そうだな。まだ夏に入って一つ虹を見てないし…。悪いやつを倒そう！」

ハカセとアネゴはもうすっかりヒーローになった気分で大はしゃぎ。

「待って。」

のんが句碑を挟みました。みんなは急にシンとなります。



「あのね。バックンベロンはさ、お腹がすいて死んじゃいそうだったから、光る子を食べちゃったんだよね…？だったら、バックンベロンは、とつても悪い人、なのかなあ…？」
そして一息ついて続けました。

「僕、思うんだ。バックンベロンが水音君を食べちゃうのは絶対ヤダ。でも、バックンベロンがお腹すいて死んじゃうのも、かわいそうで…。」

のんがそこまで言うのと、ハカセが手をポンッと打ちました。ハカセのひらめき印です。

「そっか…。のん、わかった！バックンベロンがさ、水音を食べないでも、お腹いっぱいにさ、なればいいんだ。」

のんは嬉しそうにニコニコ。アネゴと美花はハテナマーク。ハカセは咳払いをしました。

「虹を、作れば、いいのさ！」

のんはやっぱりニコニコ。アネゴと美花はびっくり。

「どうやってそんなことができるのよ？」

アネゴが不思議そうにききました。

「まだわからない…。けれどこのハカセにまかせてくれたまえ。きっと作ってみせるから！」

「みんなで考えれば、きっとできるわよね。」

アネゴも言いました。アネゴもハカセも、頭の切りかえが、とつても速いんです。



そこへのんがまたまた口を挟みました。

「水音君。水音君には、ちよつとここ、暑いでしょ？ふしぎいけでゆっくりしていて。」

みんな、水音のことは、すっかり忘れていたのです。

「うん…。」

水音は言って、ふしぎいけに帰って行きました。水音はこわい顔でした。つかれているだけでは、ないようでした…。

その後、四人は二つに分かれて、どうすればいいか探すことになりました。くびきで、美花とのん、ハカセとアネゴに分かれました。ハカセたちは、もう走り出しています。

美花とのんだけになると、なんとのは、ととろのりにもう少し入った所で、座りこんでしまったのです！

「のん、どうしたの？」

美花は驚いてのんに話しかけました。美花の顔を、じいっと見つめるのんの顔は、いつものように、にっこり笑ったのんでは、ありませんでした。

「美花ちゃん、僕、だめだった。」

のんの声は、とても沈んでいました。

「あのね、僕、バックンベロンは悪くないかもって言っちゃったでしょ？だけど、僕はきつと、水音君の前で、あんな風に言ったらね、いけなかったんだ！水音君は、自分とおんなじ風に生まれ



てきた子、みんな食べられちゃったんだ！美花ちゃん…。もし、
バックンベロンにお兄ちゃん食べられちゃったら、どう…。？」

美花はととてもとても考えました。とてもとても、難しいことだったから。

「美花ね、考えたんだけど…。」

美花はやっと口を開きました。

「お兄ちゃんを食べられちゃったら、きっとバックンベロンのこと、すんごく悪いって思うと思うの。だけど、バックンベロンをやっつけても、お兄ちゃん、戻ってこないでしょ？」

美花はこう言いながらも、きつと、バックンベロンを倒したら、すつきりするな、と思っていました。でも、言いました。

「美花ね、ただ、代わりに虹をあげるんじゃないかって、どんなに悲しかったか、どんなに怖かったか、教えればいいって思う。そうすれば…その悲しいの我慢すれば、きつと

強くなれるし、バックンベロンにもわかってもらえるって思うの…。本当にするのは難しいかもしれないけど、ええと…ハカセの言う難しい言葉で言うと…きぼうなの…。」

のんはじつと美花の言っていることをきいていました。そしてもう一人、木の影から話をきいていた人がいました。…水音でした。

(のんのバカ！やっぱり僕のことなんて、ちっともわかってない…。)

と思っていた、水音でした。



一週間以上たったある日のことでした。先にきちについた美花とのんが座っていると、ハカセとアネゴがものすごい熱いで走って来ました。砂ぼこりがたっています。

「のん！美花！虹を作る方法、見つかったか！」

ハカセが言い、のんと美花が首を横にふりかけた途端、アネゴが言いました。

「わかったの！おばあちゃんがね、庭にホースでサーツて水をまいたら、虹ができたの！だけど、曇りの昨日はダメで、ピカピカお天気今日は、よかったの！」

のんと美花は目を輝かせました。そこへハカセが口をつっこみま
す。

「だけど、森にはホースを入れる蛇口がないだろ……。きは畑だから、あるけどさ……。だから……。」

ちよつと止まってハカセは言いました。

「水音におとりになって、ここまでつれて来てもらおう！」

のんと美花は氷みたいに固まってしまいました。なぜって……なぜって……この前、あんなことを考えたばかりだから。水音の気持ちを考えたばかりだから。

「美花は……やっぱり……い、」

いや、と言おうとした時、森からサツと光が走り出て来ました。水音でした。



「僕、やるよ。」

水音の言葉に、なんのためらいもありませんでした。水音は、いっぱいいっぱい考えました。そして、水音は、バックンベロンを助けることにしたのです。たくさんある答えを取ることにしたのです。『許す』という答えを…。

さあ、ハカセたちの作戦、『水音をおっかけてやって来たバックンベロンに虹を食べさせよう大作戦』は成功したでしょうか？私は成功したって思うんですよ。なぜって、ぬしのきのうろの中に、誰が置いたのかわかりませんが、こんなことを書いた石がゴロンところがっていたからです。

水音の虹を知ってるかい？

たくさん答えがあったけど

選んだ答えはこの答え

自分で選んだものだから

後悔なんてしないんだ

水音を助けた四人の仲間

二人は心優しくて

二人はとつても行動派



どちらかだけじゃダメなんだ
どちらもなくちゃダメなんだ

五人の答えと行動は

大成功 大成功

これからずっと続くだろう

池と沼をつなぐだろう

水音の虹は教えてる

いっぱいいっぱい悩むこと

自分で道を選ぶこと

出来ればきつと大きくなれる

水音の虹を心にね